

道長詠の真意

— 『紫式部日記』における「女郎花」の贈答歌をめぐる —

柴 田 まさみ

一 はじめに

広く知られているように、稀代の平安女流作家・紫式部が著した『源氏物語』と、ほとんど時同じうして成立した現行『紫式部日記』^{〔1〕}には、以下のような記事が存在する。

渡殿の戸口の局に見出だせば、ほのうち霧りたる朝の、露もまた落ちぬに、殿ありかせたまひて、御隨身召して、遣水はらはせたまふ。橋の南なる女郎花の、いみじう盛りなるを、一枝折らせ給ひて几帳の上より、さしのぞかせたまへる御さまの、いとほづかしげなるに、わが朝がほの思ひ知らるれば、「これ、遅くてはわるからむ」とのたまはすることつけて、硯のもとに寄りぬ。

女郎花盛りの色を見るからに露の分きける身こそ知らるるれ

「あな疾」とはほゑみて、硯召し出づ。

白露は分けてもおかじ女郎花心からにや色の染むらむ^{〔2〕}

右述は、寛弘五（一〇〇八）年八月中旬の条であり、内容としては、次のとおりである。敦成親王御産のため里下がりした一条帝中宮彰子に、紫式部も随行した。そして、彼女に当てがわれた在所（寝殿と東対とを結ぶ東廊の東端の戸口付近^{〔3〕}）から、庭内を眺望していると、隨身を召喚して遣水を清掃・整備させている殿、すなわち道長が、目に飛び込んできた。道長は、橋廊の南側にある見頃の「女郎花」を手折って、式部の居る局の几帳の上部から、ちらつかせた。当代切った政治家として、邸内の経営に勤しむ道長のすがたに、紫式部は、一介の女房風情であり、かつ定過ぎた自らを恥じる。そのような彼女に、「これ遅くては悪からむ」と、要するに、花盛りの女郎花に対して当意即妙の歌を詠じなさいという邸の主・道長からのお達しが下ったのである。そこで、紫式部

は、「女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそし
らるれ」と詠んで見せたのだった。すると、道長は、「お
即妙なことだ」といよいよ笑みを湛えて、「白露はわきても
おかじをみなへし心からにや色の染むらむ」と返歌するわけ
であるが、この贈答歌に関して、とりわけ答歌の解について、
再検討することが小考の課題である。なお、同記事における
贈答歌は、『紫式部集』はもとより、『新古今和歌集』巻第十
六・雑歌上・一五六七番歌および一五六八番歌としても入集
しており、いわゆるところの「紫式部道長妄説」の根拠の一
つとされる一節であるから、比較的、有名な叙述であると言
えよう。以後、諸註の見解に鑑みつつ、考究を試みることに
する。

二 「女郎花」の寓意

道長の手折った女郎花の返礼として、紫式部は歌を詠まね
ばならなくなった。そこで、彼女は「女郎花さかりの色を見
るからに露のわきける身こそしらるれ」と詠じ、道長に贈っ
た。当該歌について、諸註は、それぞれ、

○池田龜鑑・秋山虔氏『日本古典文学大系』（一九五八
年・岩波書店）

女郎花の露にはえた盛りの色を見たばかりに、露のめぐ
みから分けへだてられたわが身のみにくさが思い知られ
る。自卑して道長が時めいている様を讃嘆した。天、

「身こそつらけれ」。

○萩谷朴氏『紫式部日記全注釈』（一九七一年・角川書
店）

どこかの誰かさんみたいに、きつとその女郎花も、恵み
の露をいっぱい受けて、今を盛りに咲き誇っているの
でしょう。それを見るにつけても、世間から忘れられてし
まって、情けをかけてくださるお方もない私が、どんな
にかわききって色艶もない見苦しい女か、それはよくわ
かっているのです

○山本利達氏『新潮日本古典集成』（一九八〇年・新潮
社）

（露に美しく染められた）女郎花の盛りの色を見ますと、
分けへだてをして露の置いてくれない私のにくさが身
にしみて感じられます。

○伊藤博氏『新日本古典文学大系』（一九八九年・岩波
書店）

女郎花の、今を盛りの美しさを見るにつけ、恵みの露に
隔てられて花を咲かすこともない我が身のつたなさが思
い知られることです。

○中野幸一氏『新編日本古典文学全集』（一九九四年・
小学館）

おみなえしの露を含んで今を盛りの美しい色を見ました
ばかりに、露が分けへだてをして置いてくれない盛りを

過ぎたこの身の上がつくづくと思ひ知られることでございます。

○宮崎莊平氏『講談社学術文庫』(二〇〇二年・講談社) 女郎花が朝露の恵みを受けて、今を盛りと美しい色に咲いているのを見るとすぐに、「露が分けへだてをして恵みを与えてくれないこのわが身の不遇が、思ひ知られることです。

○小谷野純一氏『紫式部日記』(二〇〇七年・笠間書院) 女郎花、(その、「露に潤う)いま盛りの(美しい)色を見ると、露が差別しているわが身の(輝きのない様)が実感されることです。

○山本淳子氏『紫式部日記』(二〇一〇年・角川文庫) 今を盛りの女郎花。秋の露が花をこんなにきれいにしたのですね。これを見るにつけても、露の恵みを受けられず、美しくはなれなかったわが姿が恥ずかしく思われま

す。

と訳出ないしは註しておられるが、花盛りの女郎花と、恩恵の露の降りないわが身とが対置されている構図であるとする点、共通している。とりわけ、『新編全集』が、「露は道長の情愛」と頭注にて述べておられるように、「露」は、道長の喩的表現であることはたしかであろう。一方で、「女郎花」については、「(露に美しく染められた)女郎花の盛りの色」(『古典集成』)とか「おみなえしの露を含んで今を盛りの美

しい色」(『新全集』)、「今を盛りの女郎花」(『角川文庫』)などとされているため、一見すると、「女郎花」には、特に如何なる寓意も託されていないように思われるが、『全注釈』が、「どこかの誰かさんみたいに、きつとその女郎花も、恵みの露をいっぱい受けて」と訳しておられるように、「露」と同様、「女郎花」にも何らかの意が準えられていると、捉えるべきではないだろうか。例えば、式部が「自卑して道長が時めいている様を讚嘆した」と註される『大系』や、近註だが、「道長の立派さと栄えを讚えつつ、わが身を謙遜したもの」とされる『学術文庫』などが提示する「女郎花道長比喩説」に対し、『全注釈』は、語釈項において、

この一首の歌意については、『全釈(小室)』『全釈(阿部)』『考証』『大系』『文庫(秋山)』等、近来の諸註はことごとく、女郎花を全盛の道長にたとえ、盛りを過ぎた式部自身の醜さを卑下することによって、女郎花の美しさ、従って道長の栄えを讚嘆したものであるとする点において一致しているが、それにはいささか異論なきを得ない。

とされ、さらに、

この一首の主題は、盛りの女郎花に比較して、わが身の薄幸と衰貌を嘆くところにあるのであって、わが身に比べての相手への讚嘆ではない。その場合、女郎花を道長にたとえたのであるとするならば、それは怨嗟の歌となっ

て、はなはだ妥当を欠くことになる。その上、歌語としての女郎花は、あくまでも女性を譬喩するのに用いられているのであって、男性たる道長を女郎花に擬することは許されない。やはり、同じ女性としての女郎花と式部自身との比較が一首を構成しているものと考えねばならない。と続けておられるが、和歌内部の構図が、「讚嘆」ではなく「比較」であること、そして、和歌的な表現としての女郎花は、女性を比喩するそれであることを指摘されている点、當を得ていると言えよう。他方で、「女郎花」は、女性を喩える歌語であると踏まえつつ、同歌が収載されている『紫式部集』の詞書に鑑み、田中新一氏は、『新注和歌文学叢書^⑤ 紫式部集新注』(二〇〇八・青簡社)において、

「をみなへし」は正に若い姫君、中宮彰子を指す。(中略)道長が差し入れた真つ盛りの女郎花を賞賛して中宮の栄耀を祝い、そこに仕える我が身の矮小さを述懐する式部、という構図であり、式部の詠むのは、「日記」のような容姿美の落差などではない。

とされ、女郎花中宮彰子比喩説を提唱されているが、久保田淳・馬場あき子氏編『歌ことば歌枕大辞典』(一九九九・角川書店)「女郎花」の項で、黒田彰子氏が、「勅撰集の中で女郎花の用例が多いのは、『後撰集』で『あだなる女性』という点に発想の基本を置くものが多い」と評されるように、

○女郎花の心のあだなれば秋にのみこそあひわたりつ

れ

『後撰和歌集』・巻第六・秋中・読み人知らず・二七六
○女郎花色にもあるかな松虫をもとに宿してたれを恋ふらむ

(同上・秋中・読み人知らず・三四六)
などといった詠にみても、どちらかというところ、中宮を寓喩していると捉えるのは、厳しがる。では、「女郎花」には、いったい如何なる内容が託されているのだろうか。繰り返しになるが、当該歌の構図は、

○花盛りの女郎花に露をいっばいに浴びている
○式部じしんに露に分け隔てされている身

という具合であった。男性である道長でもなければ、式部じしんが伺候する中宮彰子でもないとするれば、身的上の式部と相応の女性、すなわち、同僚女房たちであると言えはしまいか。このことについて、久保田淳氏は、『新古今和歌集全注釈^⑥』(二〇一一・角川書店)において、

「女郎花」は道長に手折られた眼前のおみなえしを意味するとともに、中宮の御所などに宮仕えしている若く美しい盛りの女房たちを寓する。

と述べておられる。たしかに、『全注釈』が「誰かさん」とされるように、「女郎花」は一輪なのだから、特定の誰かではないか、という議論もあろう。しかしながら、「女郎花」という花は、一輪に小さな花を数多つける植物である。その

花のひとつひとつが、中宮方の光輝く女房たちであったと看做せば、「女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそしらるれ」との式部詠は、女郎花の花盛りの色のごとく、照り映える女性たちを見るにつけ、白露のような道長様に、分け隔てされる私めの身の上が知られることです、と解せはしまいか。つまり、中宮方の道長の恩沢を一身に浴びる女房たちと、女盛りが過ぎた、道長の恩恵も受けていないわが身（もとよりそれは、和歌的論理における皮肉にすぎないだろうけれど）を対比した和歌であると考えられよう。

三 答歌の解釈

元来、当該節における道長の答歌は「白露はわきてもおかじをみなへし心からにや色の染むらむ」とあるにもかかわらず、

○池田亀鑑・秋山虔氏『日本古典文学大系』（一九五八年・岩波書店）

白露は分け隔てなどすまい。女郎花は美しくなるうとするからこそ盛りの色が染まるのであろう。

○萩谷朴氏『紫式部日記全注釈』（一九七一年・角川書店）

露は、この女郎花だつてどの花だつて、えり好みして置くわけじゃあるまい。ただその露の情けを感じて色気が出るかでないか、それは花自身、いってみりゃ、おまえ

の心がけ次第だろう。

○山本利達氏『新潮日本古典集成』（一九八〇年・新潮社）

白露は分け隔てなどして置いてはいないだろう。女郎花は（美しくなるうとする）自分の心で美しく染まっているのだろう。

○伊藤博氏『新日本古典文学大系』（一九八九年・岩波書店）

白露は分け隔てなどして置いたりなどすまい。女郎花は心の持ち方ひとつで美しくも染まるのだろう。

○中野幸一氏『新編日本古典文学全集』（一九九四年・小学館）

白露はなにも分けへだてをして置いているわけではあるまい。おみなえしが美しい色に染まっているのは、自分が美しくなるうとする心だてからであらうよ。

○宮崎莊平氏『講談社学術文庫』（二〇〇二年・講談社）

白露は分けへだてして置いているわけではありますまい。女郎花はみずからの心の持ちようによって、このように色美しく花を咲かせているのだと思えますよ。

○小谷野純一氏『紫式部日記』（二〇〇七年・笠間書院）

白露は差別しているのではない。女郎花はおのが心によって、（こうも美しく）色が染まっているのだろう。

○山本淳子氏『紫式部日記』（二〇一〇年・角川文庫）

白露はどこにでも降りる。その恵みに分け隔てなどありはしまし。女郎花は、自分の美しくあろうとする心によつて染まっているのだ。(お前の心がけ次第ではなかなかのものだよ)

という具合に、上句「白露は分けてもおかじ」の註釈は原文のとおりではあるものの、下句「心からにや色の染むらむ」の解釈については、疑問の係助詞「や」の意味が反映されていないことがわかる。おそらく、この道長詠は、紫式部が、〈花盛りの女郎花に白露が置いて、華やかであるのにつけ、道長に分け隔てされる自らの身の上が悪い知られる〉と詠んだのに対しての返歌であるため、〈白露が分け隔てもしないように、自分も差別しないし、女性たちは、女郎花のごとく、めいめいの意志によって色づいているのだらう〉と、贈歌の切り返しとして対をなすものであるといった論理によって、上記のとおり解釈されているのだと推測される。が、だからといって、係助詞「や」を読み取らないというわけにはいかない。

知られるとおり、係助詞「や」の語法的意味としては、疑問ないしは反語であり、文章において使用される際の位置としては、文中だけでなく文末にも用いられる。当該箇所は「心からにや色の染むらむ」であるから、文中に来ているわけだけでも、種々の語句の連用形に接続し、連体形で結ばれるという点は、断定の助動詞「なり」の連用形「に」に接

続しているし、文末は、現在推量の助動詞「らむ」の連体形で結ばれているとみて誤りではなからうから、原則どおりである。また、係助詞「か」は、事象に対する疑念が深いとされる一方、「や」は柔らかな疑いを意味することが多いようである。いずれにしても、そうした語法的側面に鑑みれば、当該歌の下句は、〈心から色が染まっているのであらうか〉と訳出されなければならないことになる。先に、当該歌は、『新古今和歌集』に入集していると述べたが、実は、同集の註釈においては、

○久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎氏『日本古典文学大系』(一九五八・岩波書店)

白露が相手を区別しておくこととはあるまい。女郎花は自分の心から、色々の色に或いは濃くまた薄く染まるのであらうか。

▼私は人を区別しはしないが、あなたの方で依怙最厚があると思うのである。

○久保田淳氏『新潮日本古典集成』(一九七九・新潮社)
白露は区別して置くわけではないでしょう。おみなえしは自分からそう心がけて色美しく咲くのです。あなたも氣を若く持って、いつまでも美しくしていたらよいではありませんか。

怨みがましい紫式部の言を慰撫した。彼女は道長の召人(愛情をかけられた女房)だったと見られる。参考「秋

萩にまづさす枝よりうつろふを露の分くとは思はざらなむ」(『拾遺集』雑下、壬生忠岑)

○田中裕・赤瀬信吾氏『新日本古典文学大系』(一九九二・岩波書店)

いや、白露は分け隔てなどすまい。女郎花は自分の心がけであてやかに色づくのではなからうか。

▼分け隔てするのではなく、全ての人が心がけ次第、自分でくすんではよくないと応じている。参考「秋萩にまづさす枝よりうつろふを露の分くとは思はざらなむ」(拾遺・雑下・壬生忠岑)

○峯村文人氏『新日本古典文学全集』(一九九五・小学館)

白露は、差別して置くわけではあるまい。女郎花は、自分の心から色が美しく染まっていることであろうか。

女郎花の美しさは、白露が差別して置くからではなく、それ自身のものかと応じ、贈歌の恨みを軽くあしらった。意味がほどよくきいている。―口語訳及び左注項より

分けても置かじ―差別して置くわけでもあるまい。

心からにや―自分の心から。「や」は疑問の係りの助詞。

▼上句で作者(道長―論者註)が差別して心をかけるのではないこと、下句で差別すると思うのは紫式部の心からであることを暗示する―頭注及び批評の項より

とあるように、いずれも、疑問の係助詞「や」を訳出してはいるものの、解釈には難渋しているのであった。すなわち、疑問の係助詞を訳文に加味しておきながら、これまでの『紫式部日記』の諸註釈が示す訳文(へめいめいの意志によって色づいているのだろう)といった展開として読もうとしている点、注意したい。

まず、『大系』では「染まるのであろうか」と、ほぼ原文どおりに訳しているものの「濃くまた薄く」と意識を示しておられる点、賛否が分かれるところであろう。また、紫式部は贈歌で、

○他の女房たち(女郎花) 〓道長(白露) によって輝いている

〓式部じしん 〓道長(白露) によって差別されている身の上

という図式を構えたのに対して、道長は、「女郎花は自分の心から(中略)染まるのであろうか」と疑念を呈しているわけであるが、にもかかわらず、「あなたの方で依怙最良がある」と断ずるのは、いささか本来の原文の方向性に齟齬をきたした批評ではあるまいか。

次に、『古典集成』では、「心からにや色の染むらむ」であるにもかかわらず、「自分からそう心がけて色美しく咲くのです。あなたも気を若く持って、いつまでも美しくしていたらよいではありませんか」としている点や、貴女も若く云々

というのは、「思ひ知ら」れる「わが朝がほ」を、なれば老境に差し掛かったわが身の衰えを慨嘆しての言であると解した上での所為であろうが、「ありません」という否定的な文言を創出している時点で、原文から逸脱していると言わざるを得ないだろう。さらに、冒頭に述べた、いわゆる「紫式部道長妾説」を持ち出し、ゆえに「慰撫」したとの評言は、原文を如何に読み解けば、そうした解釈に至るのか、疑念を禁じ得ない。

続く、『新大系』も『古典集成』同様、「なかるうか」と、原文には無い否定的ニュアンスを盛り込み、さらには、その訳文から「自分でくすんではよくないと応じている」との評言にまで発展している。

他方、『新全集』は、「自分の心から色が美しく染まっていることであろうか」と語法を遵守した上で解釈を施し、なおかつ、頭注において『や』は疑問の係りの助詞」と示しておられる点は、慧眼と言うべきである。が、しかしながら、「贈歌の恨みを軽くあしらった」という鑑賞もさることながら、「下句で差別すると思うのは紫式部の心からであることを暗示する」という、訳文をないがしろにし、原文からは、まず読み取り得ない臆断を展開している点、遺憾である。

以上のように、疑問の係助詞「や」を黙殺することなく、訳文に反映している点、『新古今和歌集』系統の註釈書は、一定の評価はできるものの、訳出したうえで、如何なる内実

を伴った返歌であるのか、道長詠の真意を読み取るには至っていないため、再考すべき余地があると見て良さそうである。

四 道長詠の真意

前節においては、『紫式部日記』の諸註釈は、当該歌「心からにや色の染むらむ」の疑問の係助詞「や」を訳出していない点、そして、『新古今和歌集』の諸註釈は、同語句を訳してこそのものである、そうした解釈を反映したうえで、より奥深くにある道長の真意に辿り着くことなく、あたかも、『紫式部日記』の註釈に迎合するようなかたちで終止してしまっている現状を確認した。そこで、本節では、当該歌について、その表現を確認しながら、果たして、道長が本当に伝えたかったことは、如何なることであったのか、さらに、検討を重ねることとした。

改めて、本場面の展開を整理しておく。まず、ほのかに「霧」がかかっている、葉に置く露もこぼれぬ早朝、道長は、御隨身を招いて、遣水を掃除させていた。そして、道長は紫式部に、「橋」の南にある花盛りの女郎花を「一枝」、折らせなさせて、紫式部の局の几帳の上から、覗かせなされたという。その道長の「御さま」が、彼女にとって、気が退けるほど立派に映り、それに引き換え、自らの「朝がほ」の酷いことを思い知ったのだった。もとより、道長が女郎花の折枝を差しのぞかせたのは、紫式部との風雅なやりとりを期待し

てのことだったろう。この返事が「遅くては悪からむとのたま」だったため、紫式部は、硯のもとに寄り、和歌を贈答するのであった。再掲出となるが、当該場面の贈答歌は、以下のとおりである。

○女郎花さかりの色を見るからに露の分きける身こそ知らるれ（紫式部）

○白露は分きてもおかじ女郎花心からにや色の染むらむらるれ（道長）

贈答歌の論理に従いつつ、概観するなら、答歌は、贈歌に用いられた「女郎花」「色」といった語句を受け継ぎ、「露」は「白露」と言い換えて、「分きける」という語句は「分きてもおかじ」と否定する形を採り、往なしている、といったところであろう。内容としては、贈歌については、花盛りの女郎花のごとき女性たちを見るにつけ、花におりる露が分け隔てするがごとく、盛りは過ぎてるとはいえ、私も一輪の花であるのに、露のような道長様の差別されるわが身が思い知られるのです、との詠であるのに対して、道長は、白露も私も分け隔てなどはありません、女郎花は心から色が染まっているのでしうか、と返歌した、ということになる。では、なぜ、道長は「心からにや色の染むらむ」すなわち「心から色が染まっているのでしうか」などという疑問を、返歌で投げかけたのだろうか。その答えは、贈歌にあるのではあるまいか。つまり、そもそも紫式部は、周囲の女房たちと自分

自身の現在とを比較したうえで、女として、並ぶべくもないわが身のすがたを嘆き（前述したように、一定の謙辞にはかならないが）、そして、それは、道長の差別にもよるのだと詰った（もちろんこれもまた、歌の贈答ゆえの、ひとつのポーズすぎないだろうけれども）。しかしながら、それに対し、道長は、「分きてもおかじ」——分け隔てなどしてはいないと、明確に返答したのであった。分け隔てをしていないというのは、白露は、女郎花に平等におり、輝かせるといふ、言い換えるなら、邸内の女性たち一人一人にきちんと目をかけている、ということである。とすれば、女郎花は、自らの心の持ちようのみで、色づいているわけではない、ということにもなる。したがって、すべての女郎花は、白露の恩恵を蒙ることで照り映えるように、邸内の女性たちは、主人道長の恩沢に浴して活躍することであり、それは、紫式部も例外ではないということである。つまり、如上の歌意を図式化するなら、

○白露は分きてもおかじ○白露（＝道長）は女郎花（＝女房衆などの女性たち）を分け隔てなどしてはおるまい——
↓白露は女郎花に平等に置くのである

女郎花はめいめいの心の持ちようで色づいているのだらうか、むしろ、白露が平等におくからではあるまいか。という具合となる。

これまで、当該場面の答歌における「女郎花」は、めいめいの「心」によって「染まっているのだらう」と訳され、それは要するに、それぞれの心の持ちようで女性たちは花開くのだと解釈されてきた。が、「心からにや」の係助詞「や」に留意して解すると、「女郎花」は、めいめいの「心」によって「染まっているのだらうか」となるのである。なおかつ、「白露は分けてもおかじ」―白露は分け隔てなどすまい、というの、白露は、分け隔てなく、平等に花に下りる、といった意味ではなかったか。要するに、道長は、女房たちは各人各様の心持によって活躍しているのもちろんだが、何より、私の力添えによってこそ、皆、輝いているのであり、それは紫式部もその一員であるということを言いたかったのではないだろうか。

翻ってみるに、本場面における道長は、邸の確固たる主として威光を放っている。その動作こそ、邸内の遺水を、隨身をして払わせているだけであり、何の変哲もないのだが、式部の筆は、そう終止することを赦さない。ほのかに立つ霧の向こうから、当代きつての権力者・道長が、「女郎花」を手折って、式部にちらつかせるすがたは「いとほづかしげなる」と評されているのであった。例えば、当該歌について、窪田空穂氏の『完本新古今和歌集評釈』（一九六四・東京堂）における「高所に立って、紫式部という人を認め、尊重の心をもって詠んでいる歌で、道長という人を現わしている」との

言を承けて、久保田淳氏は、前掲『全注釈』において「女房に對する主人という優越的立場で歌っていることは確かで、道長の人物がうかがえることも事実である」と述べておられるが、中宮彰子出産という大事を目前にして、土御門邸に集う「女房衆」にとって、確かにそうであったはずである。同氏は、『古典集成』において、同歌を「怨みがましい紫式部の言を慰撫した」とするが、むしろ、道長は、女房衆を「鼓舞」する意味で詠んだと看做してもよいほどではなかったか。道長は、邸の主として、そして、そこに集う女房衆の「主人」として、激励と〈道長ここに在り〉という意味を込めて詠んだ、これこそが道長詠の真意であらう。

なお、余談ではあるが、白露は分け隔てなどしないし私は差別などするまい、女郎花のごとき女たちは、めいめいの心でもって色づいているのだらうか、むしろ愛情は平等に向けているゆえだ、というような歌意が、道長詠の真意であるとすれば、例えば、前述したような「紫式部道長妾説」は、少なくとも、本節贈答歌においては、成立し得ない。なぜなら、「白露」は分け隔てなどせず、道長の恩恵は、邸内の女性たち皆に降り注ぐといっているわけで、対象は、紫式部だけではないからである。

総括の意味を込めて、最後に、当贈答歌の口語訳を、以下に示しておく。

○女郎花・・・女郎花の花盛りの色をみるにつけて、邸

内の女たちの華やかさが想い起されるけれども、それに引き換え、白露が花を見て分け隔てするがごとく、道長様が差別するわが身の魅力の無さこそ思い知られることです。

○白露は・・・白露は分け隔てなどするはずもないし、わたくしも女性を差別するまい。女郎花がめいめいに色づくように、女房衆は自らの心持で華やいでいるのだろうか。

(分け隔てしないわたくしの親愛なる情があつてこそそなたも含め皆輝いているにちがいないのだ)

すなわち、紫式部は、道長の赫灼たるすがたを目の当たりにし、かつ邸内の中宮方の才色兼備たる女房とわが身を比較するにつけて、自らの醜貌を思い知るに至り、道長に分け隔てされてしまう身分であるのだと詠嘆したわけである。道長は、そうした慨嘆の妙に、笑みを浮かべながら、女性は各人各様の心模様でもって花開くのはもとより、分け隔てなどせず、恩恵は平等に与えているからこそ光り輝くのであるのだ、と返答したのだから、道長なりに、式部を鼓舞したことになのである。

五 おわりに

小考では、『紫式部日記』寛弘五(一〇〇八)年八月中旬の記述の内容を確認したうえで、「女郎花」をめぐる贈答歌を読み解いた。贈歌における「女郎花」の喩的内容、また、答歌である道長詠の下句「心からにや色の染むらむ」における疑問の係助詞「や」に着眼し、それを訳出すると、如何なる歌意となるのか、そして、テクストとのかかわりは、いったいどのような具合になるのか、試解を述べた。

ところで、「女郎花」をめぐる贈答歌を含む、寛弘五(一〇〇八)年八月中旬の条において、道長詠以降の歌のやりとりは記されない、というよりは、その往還は、これ以上なされなかつたのかもしれない。なお、叙述は、さらに、次のように展開している。

しめやかなる夕暮に、宰相の君と二人、物語してゐたるに、殿の三位の君、簾すだばの端つま引き上げてゐたまふ。年のほどよりはいとおとなしく、心にくきさまして、「人はなほ、心ばへこそ難きものなめれ」など、世の物語しめじめとしておはするけはひ、『をさなし』とあなづり聞こゆるこそ悪しけれ」と、はづかしげに見ゆ。うちとけぬほどにて、「多かる野辺に」とうち誦うたじて、立ちたまひにしさまこそ、物語にほめたる男の心地こころしはべりしか。かばかりなることの、うち思ひ出でらるるもあり、そ

のをりはをかききことの、過ぎぬれば、忘るるもあるはいかなるぞ。

いわゆる、不意に想い出される風流譚であるが、前文が「ほのうち霧りたる朝」であったのに対して、「しめやかなる夕暮」である。「宰相の君」（藤原道綱女豊子）と話をしている時に、「殿の三位の君」（藤原道長男頼通、当時十七歳）が現れ、「人は心ばへこそ難きもの」などと、落ち着いて語るものだから、式部は、若いからと言って、「あなづり聞こゆるこそ悪しけれ」すなわち、侮っては悪いと評している。そして、寛がぬうちに「女郎花多かる野辺に宿りせばあだなくあやの名をや立ちなむ」（『古今和歌集』巻第四・秋下・小野美材・二七六）の一節を口ずさんで、頼通は、出て行ってしまった。そのふるまいについて「物語にほめたる男」のように思われたのだと締め括られている。朝と夕、道長と頼通、ということで対蹠的ではあるものの、風雅な振舞いは前段と共通しているし、引歌とは言え、「女郎花」に関連する章節であることもまた同断である。若き日の頼通と相対した記憶であるが、紫式部は、「女郎花」をちらつかせ、女房衆を鼓舞するような和歌をうたい上げた道長を想起しつつ、頼通の「年のほどよりはいとおとなしく、心にくき」一挙手一投足を目の当たりにするにつけ、頼通もきくと、父道長のごとき権勢家になるはずだと、夢想していたのかもしれないが、そればかりは、想像の埒を脱するには至らない。

いずれにしても、そのような頼通の父・道長は、寛弘五（一〇〇八）年八月中旬、「女郎花」をめぐる贈答歌において、邸の主としての威厳と慈しみの情を見せた。そう解した方が、時に、豪放磊落と評される道長らしいようにも思われる。道長の代名詞と言っても過言ではない「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることも無しと思へば」⁹が吟詠される、十年前の詠歌であった。

注

（一） 現行『紫式部日記』と言われる所以は、既に明らかにされているとおりであるが、念のため、以下に概述しておく。

『源氏物語』作者・紫式部の思考や趣味が表れた著述である同『日記』は、寛弘七（一〇一〇）年ごろの成立とされるが、陽明文庫蔵古本系『紫式部集』（以下、同集の本文引用は、南波浩氏校注『紫式部集』一九七三・岩波文庫によるが、適宜、通常なされる範囲内で、私に表記を整えた箇所がある）末尾に付されている「日記歌」の中にある、

三十講の五卷、五月五日なり。けふしもあたりつらむ提婆品を思ふに、「阿私仙よりも、この殿の御ためにや、木の実も拾ひをかせけむ」と思ひやられて、

妙なりやけふは五月の五日とて五つの巻にあへるのみりも

という詞書の波線部に相当する内容が、『紫式部日記』に取材して書かれたと言われる『栄花物語』「はつはな巻」に収載されている。なお、傍線を付した箇所、同書には、「あし

た山」「さだめ」とあるが、浜口俊裕氏蔵『日記哥 紫式部』(曾沢太吉氏が昭和六年、京都帝国大学国文学科研究室本を書写した写本)には、「あし仙」「御ため」とあり、特に前者の「あし仙」は、『法華経提婆達多品第十二』に登場する「阿私仙」なる仙人であると言われる。貴重な所蔵本の開示、および、ご教示を下さった大東文化大学浜口俊裕先生には、衷心にて御礼申し上げる次第である。

そして、後代の藤原定家の日記『明月記』天福元(一二三五年)年三月二十日の条、「月並絵」をめぐる記録の中に「五月、紫式部が日記せる、暁の景氣」(国書刊行会編『明月記 第三』一九二二)とあることから、少なくとも、現行冒頭以前の寛弘五(一〇〇八)年五月記事が元来あったのではないかと言われ、首部の欠落が指摘されている。また、いわゆる、書簡体部分が、竄入したものなのか、はたまた、日記体部分(寛弘五(一〇〇八)年、寛弘六(一〇〇九)年正月)から書き継がれ、そしてまた日記体部分(年次不明十一月および五月、寛弘七(一〇一〇)年正月)として復帰していったもののかなど、新資料の発見があった場合、その研究状況の変わる蓋然性が低くは無いため、しばしば、現行『紫式部日記』と言われるのであった。

(2) 『紫式部日記』の本文引用は、小谷野純一氏訳注『笠間文庫 原文&現代語訳シリーズ 紫式部日記』(二〇〇七・笠間書院)に拠る。なお、勅撰集入集歌の本文引用は、岩波文庫版によるが、適宜、通常なされる範囲内で、私に表記を改めた箇所がある。

(3) 萩谷朴氏『紫式部日記全注釈 上巻』(一九七一年・角川書店)六六―六九頁において「作者紫式部の視基点」と題し、

詳細な考証がなされている。

(4) 当該箇所について「早朝の道長の気さくなふるまい。おみなえしを折って女に見せるといふ趣向は意味ありげである。これに対して愛の分け隔てを嘆く式部のポーズも、単なる主人と女房以上の関係を思わせる」(『新編全集』)や「怨みがましい紫式部の言を慰撫した。彼女は道長の召人(愛情をかけられた女房)だったと見られる」(『古典集成』)などと評されるように、『尊卑分脈』も「御堂閑白道長妾」と註しているほのだが、叙述の機微のみで、そう決するのは早計である。

(5) 小谷野純一氏は、『古今和歌集』(巻第十二・恋歌二・五八九)における紀貫之の詠「露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとにも思ひぞつく」を「《露》ではないが、おのが心を《花》に本気で置き始めたので、風が吹く度に振り払われはしないかと思ひぞつく」と解し、同歌について、「表象とすれば、『露』に男性、『花』に女性がおのおの託されたメタファーの修辞にもとづいていることを見抜いておく必要がある」と評されている。(『《花》と《露》の構図——メタファーとしての介在をめぐって——大東文化大学日本文学會編『日本文学研究』五十三号・二〇一三・二)

(6) 『紫式部集』の当贈答歌収載箇所の詞書は、以下のとおりである。

朝露のをかしきほどに、御前の花ども、色々に乱れ
たる中に、女郎花いと盛りなるを、殿、御覧じて、
一枝折らせたまひて、几帳の上より、『これ、ただ
に返すな』とて、たまはせたり。

女郎花さかりの色を見るからに露の分きける身こそ知ら

るれ

と書きつけたるを、いと疾く

白露は分きてもおかじ女郎花心からにや色の染むらむ

ちなみに、山本淳子氏『角川文庫』における補注項では、如上の一文を引用したうえで、「家集の道長は多種の花の中からことさらに女郎花を選ぶ。紫式部にかけた言葉も返事の遅速ではなく内容の機微を求める。また紫式部の詠歌に応じて道長が早く返している。家集の道長には恋めいた雰囲気が見て取れる。比して『紫式部日記』の道長は、隨身を従え、庭を清め、紫式部に早い詠歌を要求し褒めるなど、「家を経営するあるじとしての姿が強調されている」と評されるが、『家集』本文の、この程度の展開だけで、道長には恋愛めいた気色を認定できると断じることが避けるべきであろう。また、『日記』本文では、土御門邸主人としての存在が「強調」されているとされるが、『家集』本文の「いと疾く」も、女房の在り方の手本となるよう、主として素早く返歌したと読むことも不可能ではないから、『日記』のみが、主人としての道長を「強調」しているとは言いつれないのではなからうか。

(7) 中田祝夫・和田利政・北原保雄氏編『古語大辞典(コンパクト版)』(一九九四・小学館)には「か」と「や」について、『か』が疑問点を取り上げて鋭く疑うのに対し、『や』は文全体の叙述を柔らかに疑い問いかける意であるといえるようである」とあり、また、山口明穂・秋本守英氏編『日本文法大辞典』(二〇〇二年・明治書院)には『や』は、当該部分を疑問点として明示する性格が乏しいので、文全体の肯否をたずねる判定要求の疑問語としての性格が強い」とある。

(8)

山本淳子氏は、前掲『角川文庫』の脚注において「自らの意志を強く持てと、女房としての紫式部を鼓舞する。返事の早さへの評価同様、主人の視点からの詠歌」と解説されるが、確かに、家を切り盛りする主人としての視点から、道長は、式部を評価こそしているものの、「あな疾、とはほゑみて」とあるように、決して、自分自身の意志を強く持てという意味合いで鼓舞してはいないのでなからうか。

(9)

藤原実資『小右記』寛仁二(一〇一八)年十月十六日条、威子立后による宿縁行事にて詠まれた歌。「此世乎は我世と所思望月乃欠たる事も無と思へは」とある。(笹川種郎氏編『史料通覧 小右記二』一九一六・日本史籍保存会)